

## Y15a 緯度観測所と水沢の公立女学校

馬場幸栄（一橋大学）

国立天文台は昭和 63 年に東京天文台、緯度観測所、名古屋大学空電研究所第三部門の統合改組により誕生した。そのうちのひとつである緯度観測所は文部省直轄の組織として明治 32 年に岩手県の水沢に設立されたが、地域と親しい関係を形成し、観測所と地域とが互いに支え合うことで発展してきた天文台である。そのことは緯度観測所と水沢の公立女学校との関係からもうかがえる。水沢の公立女学校は明治 44 年に胆沢郡立実科高等女学校（明治 44 年—大正 12 年）として誕生し、その後、岩手県立水沢実科高等女学校（大正 12 年—大正 15 年）、岩手県立水沢高等女学校（大正 15 年—昭和 23 年）と名称を変え、昭和 23 年に共学の岩手県立水沢高等学校に改組されるまで続いた。この女学校は一貫して緯度観測所と親しく交流した。特に緯度観測所の初代所長・木村栄（在職：明治 32 年—昭和 16 年）は同校の校長と親しく、同校における講演や寄稿だけでなく課外活動の指導まで行った。また、第 2 代所長・川崎俊一（在職：昭和 16 年—昭和 18 年）および第 3 代所長・池田徹郎（在職：昭和 18 年—昭和 38 年）は同校校長のひとりと偶然にも広島高等師範学校時代からの知り合いであった。大正 11 年に緯度観測所が国際緯度観測事業中央局となり、事業の遂行により多くの人手が必要になると、翌大正 12 年より緯度観測所は地域の女性たちを積極的に雇用し始めた。なかでも特に多かったのが、この水沢の公立女学校の卒業生たちである。緯度観測所にとって同校は必要な人材を確保するための重要な存在であり、また女学校にとっても緯度観測所は卒業生の就職先として重要な存在だったのである。